

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370734

研究課題名(和文) 非英語圏英語プログラムへの留学体験が言語習得、国際理解へ及ぼす影響に関する調査

研究課題名(英文) Investing influences of study-abroad experiences on language learning and intercultural understanding in EMI programs

研究代表者

飯野 公一 (Iino, Masakazu)

早稲田大学・国際学院・教授

研究者番号：50296399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「グローバル人材育成推進事業」(平成24年度)に採択された本学から非英語圏へ派遣された日本人学生に焦点をあて、彼らの留学体験が英語、現地語の言語習得、国際理解および異文化コミュニケーション能力に与える影響、効果を分析することを目的とした。オンライン質問票、ポートフォリオ、授業観察、インタビュー調査、フォーカルグループディスカッション等を含むエスノグラフィック調査の結果、非英語圏留学では日本語、英語、現地語等多言語、多文化環境に置かれる中で外在的言語ネイティビズムから解放され、言語を相対的(etically and emically)に分析し、認識していく能力の向上が観察された。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the influence of study abroad experiences on the Japanese students who were dispatched to the EMI (English medium instruction) programs in non-English speaking countries/regions, in term of their development of linguistic and cultural awareness. Based on the ethnographic study, employing on-line questionnaires, study-abroad portfolios, classroom observations, interviews, and focal group discussions, it was found that those students, being immersed in multilingual/multicultural environment, developed their skills to etically and emically analyze and recognize their use of language, such as Japanese, English, and local language(s), and to be freed from the externally imposed linguistic "nativism."

研究分野：社会言語学

キーワード：社会言語学 言語政策 英語教育 留学 EMI 非英語圏 グローバル人材 ELF

## 1. 研究開始当初の背景

これまで日本における留学政策は国際貢献という観点から、途上国からの留学生受け入れに重点が置かれてきたが、日本人の海外留学についての対応は不十分であり、また、受け入れはアジア中心、派遣は欧米中心であり、不均衡な状態であった(中央教育審議会、2003)。この不均衡は早稲田大学国際教養学部(非英語圏である日本において英語で授業を行うプログラムの一例)の1年間必修留学プログラムにおいても顕著である。しかしながら、2割程度ではあるものの、非英語圏へ留学する学生が最近徐々に増加している。米英中心からより多極化された世界の政治経済的变化を背景に多言語、多文化社会への関心が高まりつつあるなか、非英語圏において英語で授業が行われる、インターナショナルプログラム(あるいはEMI: English Medium Instruction)の増加もこうした留学先の選択へ大きな影響を与えている可能性がある。このような選択行動は、個人レベルでの言語ステータスプランニング(status planning, Haugen, 1983)としてとらえることができ、言語計画・言語政策理論の次なる展開の可能性を持つ。こうした中、これまでの留学と言語・文化学習の研究の多くが、「ノン・ネイティブ」の言語学習者が「ネイティブ」の言語社会に留学し、そこでどのような学習環境のなかで言語習得の経験をするか、ということが主題であった(Iino, 1996, 2006)。しかしながら、上述のように非英語圏における英語で授業を行うプログラム、すなわち現地での生活言語と学習言語が異なるような学習環境のもとで、学生がどのような社会言語生活を体験し、それが言語習得や言語態度を形成するうえでどのような影響を与えるかについての研究はこれまで行われていない。また、学習者の言語習得状況や学習経験を留学前と後でシステマティックに検証した研究もわずかであるのが現状である(Freed, 1995; Collentine & Freed, 2004; DuFon & Churchill, 2006; Jackson, 2008)。留学は外国語学習にとって最も手取り早い効果的な方法であると多くの人々が信じているものの、留学期間中にどのような言語資源、環境が言語学習へ影響を与えているのかについては、学術的研究が十分なされてきたとは言えない。

これまで、博士論文をもとに“Language Learners in Study Abroad Contexts”(Eds. DuFon & Churchill, 2006)において“Norms of Interaction in a Japanese Homestay Setting: Toward a Two-Way Flow of Linguistic and Cultural Resources”を執筆し、留学を個々人の体験として分析するとどまらず、マクロレベルでの政策課題として研究を続けてきた。また、勤務校でプログラム立案を担当した平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」において「英語がつなぐグローバルキャンパス

への取組」が、また平成20年度「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」において「多文化・多言語社会に向けての教養教育」が採択され、こうした取り組みを通じて日本人学生の留学先での社会言語体験を新たなコンテキストで研究を行ってきた。

さらに、留学センター所長として、平成23年度に採択されたグローバル・リーダーシップ・プログラム(GLP)において、米国の有力大学との交換留学、共同ゼミなど、日米双方の学部生がともに学ぶ仕組み作り、また、平成24年度に採択されたグローバル人材育成推進事業では、学部教育の国際化、留学機会の多様化に取り組んできた。本研究においては、こうした事業に参加する学生を対象に、ポートフォリオを課し、その結果を集計分析するとともに、対象となる国、地域ごとに数名程度を選出し、インタビュー調査、現地での観察調査を行い、個人レベルでの国際理解および異文化コミュニケーション能力習得の状況を調査することとした。本研究は平成21年~23年に申請者が研究代表として採択された基盤研究(c)「社会言語学的環境の異なる留学体験が言語取得・言語態度に及ぼす影響に関する調査」を非英語圏というコンテキストに限定することにより、アジア圏に共通する言語課題について分析を深化させる機会となった。

## 2. 研究の目的

本研究では、日本人大学生の非英語圏における海外留学経験が彼らの言語習得、言語態度(language attitudes, Brown, 2000; Schumann, 1976)、アイデンティティ、国際理解、異文化コミュニケーション能力等の形成にどのような影響を及ぼすかを調査、分析することが目的である。とくに英語を教育言語(EMI)とするプログラムのなかで、Kachru (1985)のモデルの3つのタイプの地域(英語を母語とする人々が入植し、英語が第一言語として話されている社会(The Inner Circle, 例えばアメリカ、オーストラリア)、英語が旧植民地時代の統治言語として使われ、現在第二言語として使われている社会(The Outer Circle, 例えば、シンガポール、インド)、英語を外国語として学習、利用されている社会(The Expanding Circle, 例えば、中国、タイ)へ留学する学生のうち、

の非英語圏に派遣される日本人学生に焦点をあて、彼らが英語をELF(English as a lingua franca, Jenkins (2007)他)としていかに使用し、現地語をいかに習得、使用するかを主にエスノグラフィーの手法を用いて基礎データ収集した。その際インタビューや参与観察に加え、学習者が記録するポートフォリオを分析対象とする。彼らがどのような社会ネットワーク(Blom & Gumperz, 1972; Milroy, 1987)を形成し、個人レベルでの言語管理(Language Management, Neustupny 1978, 1987; Spolsky 2009)を行

い、その社会言語体験が言語習得や言語態度、さらに国際理解へ及ぼす影響を中心に調査した。

### 3. 研究の方法

本研究では、約5年間の調査を行った。対象は、アジア圏を中心とした非英語圏におけるEMIプログラムで、1ヵ月以内の短期プログラム、および6ヵ月以上12ヶ月未満の長期プログラムに派遣される学生とした。まず留学前の英語力、現地語能力、言語態度(英語、現地語、日本語を含める態度)、キャリアプラン等が留学先の選択にどのような影響を与えるかを明らかにし、留学期間中には、彼らの日常の社会言語的体験を調査した。とくに彼らの社会ネットワーク(Milroy, 1987)の形成過程とどのような言語資源へのエクスポージャーがあるのかをシステムティックに調査した。さらに、帰国後には、留学先での社会言語体験が英語力、言語態度等にどのような影響、変化を与えたかを調査した。最終的に海外留学による言語習得が国際理解および異文化コミュニケーション能力に与える影響がどのようにあられるかを分析した。

本研究では、英語・現地語能力の測定と国際理解および異文化コミュニケーション能力の測定が必要であり、短期留学および長期留学グループともにこれらの測定結果が指標となって、本研究の量的データの基盤となる。英語能力については主にTOEFL(Test of English as a Foreign Language)スコアを使用した。留学先現地語能力については、調査票調査により、学生本人の評価(各言語の公的試験結果保持者はそのスコアも参照する)による留学前と留学後の言語能力をデータ化した。

国際理解について測定する方法としては、コスモポリタン尺度(岩田, 1989)、異文化コミュニケーション能力の測定尺度(ガウラン, 1996)、英語学習における態度と動機づけに関する尺度(Koizumi & Matsuo, 1993)、国際理解測定尺度(IUS2000 in 鈴木, 他 2000)などがあるが、本研究では、日本ユネスコ国内委員会(1982)が国際理解教育の目標として掲げた3つの観点、人権の尊重、他国文化の理解、世界連帯意識の育成、に加えて、異文化コミュニケーション能力という観点から外国人と、または外国語でのコミュニケーションに対する態度の尺度を加えた測定法を、研究協力者早稲田大学アジア研究機構アジア研究所招聘研究員豊島昇氏(博士、専門社会調査士)と検討した。

また、留学前に実施する留学前アンケートと帰国後に学生に対して実施する留学後アンケートの質問項目は、PDAQ(the Professed Difference in Attitude Questionnaire, Acton 1979)の枠組みを応用し、作成した。初年度は、1ヵ月以内の短期留学をする学生に対して、留学前に言語能力と国際理解の測

定、留学前アンケートを実施し、留学を終了して帰国後に、言語能力と国際理解の測定、留学後アンケートを実施した。また、長期留学グループの調査の準備として、長期留学グループの中からフォーカスグループとして学生各10~15名を選出し、インタビュー調査を実施した。また、フォーカスグループの学生との遠隔通信(Facebook、スカイプ等)を用いた連絡体制を整備した。さらに、申請者および研究協力者は、フォーカスグループの学生の留学先(タイ、台湾)に赴き、現地調査としてエスノグラフィーの手法を用いて、学生の留学先における言語文化環境について記録した。質的調査のデータは、ビデオ、音声、画像、インタビュー記録およびFacebookログという形で蓄積された。言語能力と国際理解の測定、留学前・留学後アンケートは、指標として使用することから、収集後、逐次、データベース化された。とくに、秋学期に長期留学のグループが帰国後すぐに就職活動を開始するタイミングとなったことから、留学体験がどのようにキャリアプランに影響を及ぼしたかについてもインタビュー調査を行った。

研究体制については、全期間を通して研究協力者(上記豊島昇氏、留学センター宮房寿美子氏)および海外共同研究者(ペンシルベニア大学パトラー後藤裕子博士)のほか、留学センターの協力体制のもとで本研究を遂行した。特にアンケート調査については回収率を上げるために、オリエンテーション、留学中の学習状況調査、帰国後の体験レポート提出時の調査の一部として制度的に組み込むなども行った。

### 4. 研究成果

本研究を通じて得られた研究成果は、本助成金事業期間内では英語、日本語で雑誌(8件)、学会(25件)、書籍(5件)等を通じて発表を行った。また、平成29年度~平成32年度、科研(基盤研究(c)(一般))において採択された「非英語圏大学EMI(英語を媒介とする授業)プログラム実態調査と言語政策への提言」(課題番号:17K03028、研究代表者:飯野公一)へと継続され、より言語政策理論への研究が深化することが期待されている。また、本研究は、科研(基盤(B)課題番号:26284083、研究代表者:村田久美子(早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授))「産学ELF(共通語としての英語)使用実態調査とグローバル人材育成教育への提言」と研究分担者として関連を持ち実施された。

なお、出版図書のうち、Lino, M. and Murata, K. (2016) については、2017年JACET(The Japan Association of College English Teachers、大学英語教育学会)学術出版賞を受賞した。

本研究代表者のこれまでの研究(「社会言語的環境の異なる留学体験が言語習得・言語

態度に及ぼす影響に関する調査」2009～2011年度基盤研究(C)、課題番号21520602)を踏まえ、非英語圏大学にEMIプログラム参加学生へと対象を絞り、さらに地域的にもアジア圏(とくにタイと台湾)にフォーカスして調査を行うこととなった。これは、Expanding Circleに位置する共通の社会言語的近似性があり、調査へのアクセスが比較的良好であったことも起因している。

日本語と英語という2言語を使用していたときには経験できなかった、3つの言語を日常的に使用、分析することから得られる3次元的な言語立体感(前回の科研で示唆されたが、本研究ではELF研究の知見を応用して分析することによって、教室内、外で参加者が経験する言語使用状況が「ネイティブ」と「ノンネイティブ」というdichotomyの形で単純化されるモデルではなく、multilingual/multicultural状況のなかで効果的に言語資源を利用しながら、translingual(cf. Canagarajah, 2013)なコミュニケーション活動を行っている実態が明らかとなった。これは非英語圏EMIプログラムにおいては、多様な言語話者が参加しており、ENLの規範効果が支配的ではない実態が観察された。

また、参加学生のインタビュー調査から、外在的言語ネイティビズムから解放され、言語を相対的(etically and emically)に分析し、認識していく能力の向上が観察された。こうした環境下、参加学生はEnglish learnerからuserへと変容する傾向が分析された。これは、前回の科研調査において、暫定的に言語相対化能力(linguistic relativization competence)と呼んだが(cf. Carroll, 1991, Deutscher, 2011, Lucy, 1992)、今後は、linguistic relativization capability(ネイティブ規範にいかにかに近づくかを目的とするcompetenceに対して、“here and now”の創造的な言語適応力を表す概念、cf. Widdowson, 2003, 2016)として考察を深めていく計画である。

これまでの言語習得研究が主に教室内等のフォーマルな言語教育というコンテキストが中心であったことに対し、本研究では、多様な言語資源との接触を経験する留学というコンテキストで調査を行った。これは、当時「失われた20年」とも言われる日本経済の低迷、人口の減少等を背景とした危機感から、「グローバル人材の育成」が強く求められ、その目玉として日本人派遣留学生数の増大が提唱されているなか、実際に留学を通じて彼らが何を、どのように学び、その結果どのように彼らの言語・文化態度が変化するかを調査、考察する作業はこれまで限定的であり、このような研究取組は言語教育政策の観点から極めて重要なテーマであると考えた。

本研究は留学推奨政策で見過ごされがちな学術的側面を本課題で取り組んだ。こうした留学と言語習得の効果あるいは問題点を

表出するデータを収集し、分析することによってもたらされた結果は、内外の多くの大学が留学政策を推進するなか、政策への提言、大学間、教育現場との情報共有、また、なにより今後参加する学生たちのために大いに裨益されるよう期待される。

#### <引用文献>

- Acton, W. (1979). "Perception of lexical connotation: Professed attitude and socio-cultural distance in second language learning." Ph.D. dissertation. University Microfilm.
- Blom, J. and Gumperz, J. (1972). Social Meaning in Linguistic Structures: Code Switching in Northern Norway. in John Gumperz and Del Hymes (eds.): Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of communication, 407-434. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Brown, H. (2000). Principles of Language Learning and Teaching. New York: Longman.
- Canagarajah, S. (2013). Translingual Practice: Global Englishes and Cosmopolitan Relations. Oxon:Routledge.
- Carroll, J. (ed.) (1991). Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf. Cambridge: The M.I.T. Press.
- Collentine, J. and Freed, B. (2004). Learning context and its effects on second language acquisition. Studies in Second Language Acquisition 26 (2), pp. 153-71.
- Deutscher, G. (2011). Through the Language Glass: Why the world looks different in other languages. London: Random House.
- DuFon, M. and Churchill, E. (eds.) (2006). Language Learners in Study Abroad Contexts. Clevedon: Multilingual Matters.
- Freed, B. (1995). Language learning and study abroad. in B.F. Freed (ed.) Second Language Acquisition in a Study Abroad Context. pp. 3-33. Amsterdam: John Benjamin.
- Jackson, J. (2008). Language, Identity and Study Abroad: Sociolinguistic Perspectives. London: Equinox.
- Jenkins, J. (2007). English as a Lingua Franca: Attitude and Identity. Oxford:Oxford University Press.
- Haugen, E. (1983). The implementation of corpus planning: theory and practice. pp. 269-290. in Cobarrubias and J. Fishman (eds.). Progress in Language Planning: International Perspectives. Berlin: Mouton.
- Iino, M. (1996). 'Excellent Foreigner!': Gaijinization of Japanese language and culture in contact situations - an ethnographic study of dinner table conversations between Japanese host families and American students. Doctoral dissertation. University of Pennsylvania. Dissertation Abstracts International, 57, 1451.
- Iino, M. (2006). Norms of Interaction in a Japanese

Homestay Setting: Toward a Two-Way Flow of Linguistic and Cultural Resources. pp. 151-173. In M. DuFon and E. Churchill (eds.). *Language Learners in Study Abroad Contexts*. Clevedon: Multilingual Matters.

lino, M. and Murata, K. (2016). Dynamics of ELF communication in an English-medium academic context in Japan: From EFL learners to ELF users. In (ed.) K. Murata. *Exploring ELF in Japanese Academic and Business contexts: Conceptualization, research and pedagogic implications*. Oxon: Routledge. pp. 111-131.

Kachru, B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle. in R. Quirk and H.G. Widdowson (eds.). *English in the world: Teaching and Learning the language and literatures*. pp. 11-30. Cambridge: Cambridge University Press.

Koizumi, R. and Matsuo, K. (1993). A longitudinal study of attitudes and motivation in learning English among Japanese seventh-grade students. *Japanese Psychological Research*. Vol. 35 (1). pp. 1-11.

Lucy, J.A. (1992). *Language Diversity and Thought: A reformulation of the linguistic relativity hypothesis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Milroy, L. (1987). *Language and Social Networks*. Oxford: Blackwell.

Neustupny, J.V. (1978). *Post-Structural Approach to Language*. Tokyo: University of Tokyo Press.

Neustupny J.V. (1987). *Communicating with the Japanese*. Tokyo: The Japan Times.

Schumann, J.H. (1976). Social distance as a factor in second language acquisition. *Language Learning* 26(1), pp.135-43

Spolsky, B. (2009). *Language Management*. Cambridge: Cambridge University Press.

Widdowson, H. (2003). *Defining Issues in English Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.

Widdowson, H. (2016). Competence and capability: Rethinking the subject English. In (ed.) K. Murata. *Exploring ELF in Japanese Academic and Business contexts: Conceptualization, research and pedagogic implications*. 2016. pp. 213-223.

岩田紀 (1989) 「コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討」, *社会心理学研究*, 4, 54 - 63

ガウラン, デニス・S (1996) 西田司編著 『文化とコミュニケーション』東京: 八潮社

鈴木佳苗, 坂本章, 森津太子 他 (2000) 「国際理解測定尺度 (IUS2000) の作成および信頼性・妥当性の検討」*日本教育工学雑誌: 日本教育工学会論文誌 日本教育工学会編* 23 (4) 2000. 3 pp. 213-226.

中央教育審議会 (2003) 新たな留学生政策の展開について (答申)、平成 15 年 12 月 16 日、[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo0/toushin/03121801.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo0/toushin/03121801.htm) (retrieved on June 5, 2018)

日本ユネスコ国際委員会 (1982) 『国際理解教育の手引き』東京: 東京法令出版

## 5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計 8 件)

村田久美子、小中原麻友、飯野公二、豊島昇、EMI(英語を媒介とする授業)とビジネス現場における『共通語としての英語』への意識調査、および英語教育への提言、早稲田教育評論、32 巻、2018、pp. 55-75

Konakahara, Mayu, Murata, Kumiko, and lino, Masakazu, From Academic to Business Settings: Changes of Attitudes towards and Opinions about ELF, *Waseda Working Papers in ELF*, Vol. 6, 2017, pp. 129-147

村田久美子、飯野公二、小中原麻友、EMI(英語を媒介とする授業)における「共通語としての英語」の使用の現状把握と意識調査、および英語教育への提言、早稲田教育評論、31 巻、2017、pp. 21 - 38

飯野公二、大学のグローバル化と英語コミュニケーション、*JASEC Bulletin*. 24 巻、2015、pp. 76-77

飯野公二、留学生の心のケアと障がい支援体制、*大学時報*、366 巻、2016、pp. 80-81

飯野公二、根強い「英語ネイティブ志向」と留学先の選択、*文部科学教育通信*、359 巻、2015、pp. 18-19

飯野公二、大学の国際化と言語政策、*文部科学教育通信*、357 巻、2015、pp. 22-23.

lino, Masakazu and Murata, Kumiko. 'We are jun-Japa' - Dynamics of ELF communication in an English medium academic context. *Waseda Working Papers in ELF (English as a Lingua Franca)*. Vol. 2. 2013. pp. 84-100.

### 〔学会発表〕(計 25 件)

飯野公二、高等教育における EMI(English Medium Instruction) 言語政策の視点から、*JACET 言語政策分科会*, 2018

lino, Masakazu, How does "globalism" affect Japanese English education and should it?, *JASEC 26<sup>th</sup> Annual Convention*, 2017

Murata, Kumiko and lino, Masakazu, Introducing an ELF perspective in language policy and practice: an epistemological challenge, *AILA*, 2017

Konakahara, Mayu, Murata, Kumiko and lino, Masakazu, Changing attitudes towards the use of English in business settings among young business people: a generation or/and education gap?, *ELF (English as a lingua franca) 10*, 2017

Fu, Bennett, lino, Masakazu, and Miller, Allen, Venturing into Southeast Asia: Programs and Partnerships, *NAFSA*, 2017

lino, Masakazu and Goto Butler, Yuko, Japan's English Language Education Policies in an Imagined "English as a

- Lingua Franca” Context. AAAL. 2017
- Iino, Masakazu. South of the Border: Venturing into Southeast Asia. AIEA. 2017
- Murata, Kumiko, Iino, Masakazu, Konakahara, Mayu, and Toyoshima, Noboru. ELF Experience in EMI and Business Settings: Changes of Attitudes towards ELF. 2<sup>nd</sup> EMI-ELF Workshop. 2017
- Konakahara, Mayu, Murata, Kumiko, and Iino, Masakazu. From academic to business settings: changes of attitudes towards and opinions about ELF. the 6th Waseda ELF (English as a Lingua Franca) International Workshop. 2016
- Murata, Kumiko, Iino, Masakazu, Takino, Miyuki, McBride, Paul, and Ng, Patrick. ELF (English as a Lingua Franca) as a Catalyst for Re-thinking English Education, "ELF Users in Academic Contexts; Who are they after all?". JACET 55th International Convention. 2016
- Murata, Kumiko, Iino, Masakazu, and Konakahara, Mayu. Realities of EMI practices among multilingual students. ELF 9. 2016
- Iino, Masakazu. English-Medium Instruction (EMI) in Japanese Universities: Multiple goals and challenges as a language policy. ELF 8. 2015
- Murata, Kumiko and Iino, Masakazu. Language Policies, practices and diversity: Voices from students. LED (Language Education and Diversity). 2015
- Murata, Kumiko and Iino, Masakazu. English-medium instruction in a Japanese university: Exploring students and teachers' voices from an ELF perspective. 1<sup>st</sup> EMI-ELF Workshop. 2016.
- Iino, Masakazu. Reflection on EMI Practices: EMI, ELF and Language Education. 1<sup>st</sup> EMI-ELF Workshop. 2016
- Murata, Kumiko and Iino, Masakazu. From marginality to the mainstream: evolving identities through four-year English-medium instruction and study abroad experiences. AAAL. 2015
- 飯野公一、学部が国際化するには何をすべきか 早稲田大学の事例から、立教大学異文化コミュニケーション学部公開講演会、2015
- 飯野公一、大学のグローバル化政策と英語コミュニケーション、第23回JASEC年次大会、2014
- Iino, Masakazu. A multilingual approach to internationalization in Asia. EAIE. 2014
- Iino, Masakazu and Murata, Kumiko. Japanese students' changing views of communicative competence through ELF experiences. ELF 7. 2014.
- 21 Iino, Masakazu. Sociolinguistic perspectives on the internationalization of higher education in Asia. ICLC. 2014
- 22 Murata, Kumiko and Iino, Masakazu. Evolving identities and co-constructing an ELF (English as a lingua franca) community in an English-medium academic context, oral presentation. SS (Sociolinguistic Symposium) 20. 2014
- 23 Iino, Masakazu and Murata, Kumiko. Conflicting identities in the transitional period between EFL learners and ELF users. ELF 6. 2013
- 24 Iino, Masakazu. Preferred Study Abroad Destinations for East Asian Students. EAIE. 2013.
- 25 Iino, Masakazu. Mobility of Students, Educators and Researchers Beyond the Student Exchange Programme: Catering to International Student Needs. APAIE. 2014.
- 〔図書〕(計 5 件)
- Murata, Kumiko and Iino, Masakazu, EMI in higher education: An ELF perspective. In (eds.) Jenkins, J., Baker, W., and Dewey, M. The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca. 2018. 620 (pp. 400-412).
- 飯野公一、「外国人留学生の受入れとサステイナブル社会の実現 言語政策の視点から」宮崎里司、杉野俊子(編著)『グローバル化と言語政策』明石書店 第8章担当、2017、231 (pp. 135-150)
- Iino, Masakazu and Goto Butler, Yuko. Educating for the 21st Century (担当 Global leadership trainable for high school students in Japan: Are global leadership trainable, universal, and measurable?). Springer. 2017. 490 (pp. 153-170).
- Iino, Masakazu and Murata, Kumiko. Dynamics of ELF communication in an English-medium academic context in Japan: From EFL learners to ELF users. In. (ed.) K. Murata. Exploring ELF in Japanese Academic and Business contexts: Conceptualization, research and pedagogic implications. 2016. 261 (pp. 111-131).
- 飯野公一、ティモシー・スール、若田部昌澄、英語で政治経済学(ポリティカル・エコノミー)しませんか、有斐閣ブックス、2015、250
6. 研究組織
- (1)研究代表者
- 飯野 公一 (IINO, Masakazu)
- 早稲田大学・国際学術院・教授
- 研究者番号：50296399